

いなかのりんじん
あぐろげいとーん

編集：九州教区教会協力委員会

※あぐろげいとーん：ギリシア語で「田舎の隣人」の意味。都会の隣人と違い、互いに支え助け合う仲間となることを願って。

いけすの網を破って

教会協力委員長 深澤 奨

本誌第1号で「里山資本主義」（藻谷浩介著・角川新書）を取り上げました。比較的豊かな自然の残る地方教区にとっての希望をそこで示されましたが、このほどその続編とも言える「里海資本論 日本社会は『共生の原理』で動く」（角川新書）が出版され話題となっています。海に囲まれた九州教区にとって、これもまた良い示唆を与える好著でした。

その冒頭、著者は「海に種をまく漁師たち」について語ります。このタイトルだけでイエスの譬え話のような匂いがしませんか。瀬戸内海ではハマチの養殖が盛んですが、「その養殖の網を破って見ない？」と著者は問いかけます。「瀬戸内海全体を“いけす”だと思って、せっせとハマチが住みやすい海にしていけばいいではないか。…理想的な天然のいけすを目指そうではないか」。実際そういう発想で地道に海底にアマモの種を植えるなどして、めざましい成果をあげ始めている「海に種をまく漁師たち」が次々に紹介されます。そしてその姿は、同じく“漁師”を標榜する私たちにとって大変刺激的です。

教会は自分の囲いの中だけを考えていないだろうか。教

会こそ、そのいけすの網を破ってみるべきではないのか、と考えさせられたことでした。自分の教会の中にだけ魚が満たされ、すくすく育つだけで良しとするのではなく、九州全体、社会全体を、あるいは九州教区全体を「大きないけす」として形成する。そういう発想が必要であり、そしてその一つの表れが互助という仕組みなのだろうとも思うのです。

ところでそういう観点で九州教区を改めて見てみると、まんざら捨てたものではないと気づかされます。下の表は全国の各教区別に、教区・教団全体の働きのため、特に小規模教会を支える互助などの働きのために、現住陪餐会員一人あたりいくら負担しているかを示しています。教区間互助（教区活

	教区・教団負担金	その他負担金	互助献金	現住陪餐会員	一人あたり負担額
北海	27,000,000	23,500,000		2,586	19,528
奥羽	20,900,000		6,050,000	1,706	15,797
東北	18,700,000	6,007,000		2,454	10,068
関東	40,992,000		12,443,119	6,496	8,226
東京	116,414,490	14,566,000		18,147	7,218
西東京	40,776,000	5,080,900	5,667,979	6,819	7,588
神奈川	58,805,000		2,314,833	8,337	7,331
東海	31,814,800	7,772,000		4,552	8,696
中部	35,189,900	16,440,000		4,943	10,546
京都	33,370,000		5,125,116	3,513	10,958
大阪	48,995,000	7,099,300	1,000,000	7,136	8,001
兵庫	52,958,000		16,558,059	7,324	9,491
東中国	14,440,000		667,886	2,034	7,428
西中国	20,050,000		3,476,519	1,997	11,780
四国	20,400,000		23,364,144	2,604	16,807
九州	43,420,800		9,243,000	4,289	12,279
沖縄	4,815,000	3,600,000		575	14,635

動連帯配分金制度) がまだ機能していた 2014 年度のデータですから、現在はこの数字よりもさらに教区間格差は広がっていると思われませんが、その 2014 年度でさえ、東京教区の一人あたり負担額は、九州教区の 60%弱、北海教区の 40%弱に過ぎません。概して言えば、中央から遠い、より辺境に位置する教区ほど、教区・教団・他の教会のために多くを献げ、逆に、中央に近いほど、都会ほど、自分の教会だけになっていく傾向が示されています。

九州教区は全 17 教区中で多い方から 5 番目に位置します。あくまで比較の話ですが自分のいけすの外にも責任的に関わる教区だと言ってもいいでしょう。ただし九州教区の全ての教会がそのような意識と実態を持っているわけではありません。右の表は、「2014年度の地区別互助献金額と現住陪餐会員一人あたりの献金額」を示しています。全国的に見られるような、都市部の規模の大きな教会ほど自分のいけすの外に興味を持たないという傾向はこの九州においては幸い見られませんが、地区によってかなり大きな格差があります。地区対抗で競い合

2014年度地区別互助献金額と一人あたり平均額

	互助献金	現住陪餐	一人あたり
北九州	1,182,430	553	2,138
福岡	2,581,838	1092	2,364
筑後	498,160	134	3,718
佐賀	185,300	92	2,014
長崎	1,536,550	561	2,739
熊本	264,300	468	565
大分	1,152,830	451	2,556
宮崎	865,300	499	1,734
鹿児島	588,200	357	1,648
奄美	222,400	60	3,707
計/平均	9,077,308	4,267	2,127

う必要はありませんが、他の地区のがんばりを励みとし、地区内で呼びかけあっているだけでいいと思います。そして、願わくはひとつひとつの教会が小さいいけすを作ってその中にだけ御国を現そうとするのではなく、あの「海に種をまく漁師たち」になり、みんなが住みやすく生きやすい、大きく理想的な天然のいけすをこの地に作っていったら素晴らしいことだと思うのです。Ω



兼牧・共同牧会を視野に

川内教会 戸田奈都子

九州の教会に遣わされて 18 年、信徒・神学生時代をのぞいては、この九州教区しか私は知らない。なのでこの九州で「キリスト者の生き方」を教えてもらい、「牧師として生きる」ことを考えてきた。特に小さな市・町・村の牧師の一番の仕事は、「その町にその町の人と一緒に住むこと」から始まる。主イエスがそうだったように、伝道、すなわち福音を分かち合うことは、同じ空気をすうことから始まるからだ。なので、無牧の教会が近くにあると、気になってしょうがない。無牧の教会が多い九州教区では、おそらく多くの牧

師先生方も同じ思いだと思う。

現在九州教区ではおおよそ 20 の教会・伝道所に定住の牧師がおられない。つまり 20 人の牧師が、2 つの教会を代務もしくは兼務牧会しているということになる。ということは、127 教会の内、3 分の 1 にあたる約 40 の教会が一人の牧師を「シェア」していることになる。

「体が 2 つあればいいのに…」という思いで本務教会で主日の朝礼拝を献げ、車を走らせ、午後から 2 つ目の教会で礼拝をし、聖餐式をし、役員会をし…という牧師仲間があちこちにおられる。川内教会は 1 教会に 2 人の牧師がいるので、主任は主日の朝から 100 km 離れた小規模教会（以前専任牧師がおられた時は互助受給教会であった）に月に一度おも

むく。そして、そこでうらやましいほど豊かな信仰の交わりに加えられる幸いが与えられている。みなさんが心から待っていてくださるのだ。

九州教区で「兼牧・共同牧会」の声が聞こえ始めて久しいが、教区全体、いや、地区の中でさえ、複数の教会の共同伝道についてなかなか話が深められない。「なんとなく、よその教会のことは口出しできない」という遠慮？の中、共同牧会への新たな展開はかなりゆったりと進んでいくのだろう。

九州教区で教えられた「彼の地の教会を、私の代わりに〇〇先生が牧会しておられる」という考えは都会の教区しか知らなかった私には、まさに目からウロコだった。「そうか。同労の先生がそこで伝道しておられるからこそ、私のこの教会での伝道が成り立ち、互いに支え合うからこそ、神の国が広がり実現していくのだ」という当たり前のことに、私は九州教区の互助の精神から学ばせて頂いた。私たちは主イエスという「まことのぶどうの木」のひとつひとつの「枝」であり、それぞれがしっかりと「枝」の役割を果たすことが、神の愛したたる「ぶどうの実」を結び、農夫である神の栄光になるのだという福音が、互助制度を通して実感できるようになった。(そもそも「枝」の分際で、「あちらの枝のぶどうは少ない」とか、「多い」とか言うこと自

体がおこがましいというものだろう。)

兼牧、あるいは共同牧会を視野にいれるならば、例えば兼牧して頂く謝儀分を、互助の謝儀収入にプラスするというのは、小さな教会間を移動しながら牧会している現実からはかけ離れているように思う。むしろ、それを加えない方が、兼牧体制は整えやすいのではないだろうか。

おそらく北海道に次いで広範囲の伝道圏を持つ九州では、小さな教会になればなるほど、伝道牧会範囲は広い。都会で数十分の隣の教会を受け持つとはわけが違う。それこそ半日、1日仕事で、時間も労力も気力もガソリン代もかかる。しかしそのような小さな数人の共同体を何よりも大事にしてきた九州教区なら、兼牧・共同牧会体制を整えていく素地は十分すぎるほど既にできているのではないだろうか。127教会の信徒・牧師全員が、その精神を共有しているのならば、わざわざ「互助献金をお献げ下さい」などと呼びかける必要はない。彼の地の教会はわたしの姉妹・兄弟の教会なのだという実感が、献げる喜び・恵みへとつながっていくと私は確信している。なのでどの教会も自分の教会、自分の牧師、自分の信徒だと思って、全員で喜んで互助献金を献げていきたい。ただし、「全財産を献げても、愛がなければ無に等しい」という戒めを心に刻みつつ…。

もらってうれしね

今回は小倉日明教会からリソグラフ用のマスター（RPマスター-03 S-3060）4本の出品です。対応機種は「RP210L、RP210S、RP210LS、RP215、RP250、RP255（ネット調べ）」。

本体故障のため在庫品が不要になってしまったとのこと。早い者勝ちとなっております。ご希望の方は教区事務所もしくは教会協力委員長（深澤）までご連絡下さい。なお写真は、ネットから拝借した同一品と思われる商品のもので、実物ではありません。

前号掲載のファックス電話機は、行橋教会に引き取られました。今後とも、「探しています」、「譲ります」などの情報がありましたら、教会協力委員会までお知らせください。



伝道費援助金を受けて

小林教会 代務者 山田雅人

教区より一昨年から伝道費援助金をいただいています。教会の維持・運営にとって大きな力となっており、感謝に堪えません。現住陪餐会員7名ですが、3名は遠方におられ、4人の経常出席者と数名の求道者で月2回の礼拝を守っています。会員の献金だけでは黒字は見込めませんが、伝道費援助金はもちろん、かつて小林教会におられ今は他所に住んでおられる方々から貴い献金が送られてくることもあり、不思議な支えによってこの地での伝道を続けることが出来ています。

昨夏、仕事で四国の教会を訪ねたときのこと、私が来ることを人づてに聞いたある女性が近づいて来られ、「小林教会

にゆかりのある者です」と、お土産と献金を渡して下さいました。その方はそれまでも定期的に小林教会の通帳に献金を振り込んで下さっていた方でした。自分の教会だけでなく、自分がかつて一度でも世話になった教会のことを覚えて祈り、支援をして下さっている一こうした方々を通して神の働きが現されていることを痛感しました。それは、教区の互助献金を献げられている各教会の信徒一人お一人も々です。

「この地での伝道の灯を消すことなく」一いつも礼拝で祈る文言ですが、牧師の働きだけでそれが叶うはずありません。自分の教会の中だけでなく見えない一人一人の力が合わさって神の国が形成されていく。そのことを信じてこれからも尽力したいと思います。

互助献金中間報告 (2015年12月末現在)

2015年度も残すところ3ヶ月となってしまいました。今年度の互助献金は、期初から上半期まではハイペースで献げられ、昨年同期よりも上回っていましたが、ここに来てブレーキがかかり、ついに昨年同期に追い抜かれてしまいました。昨年度は目標の1100万円に180万円ほど足らない924万円でフィニッシュでしたから、このまま行けばさらに少ない額で終わりかねません。繰り返しお願いしてきた教師互助献金については、大幅増額となっていますが、現時点で教師互助献金を献げておられる教師は26教会に過ぎません。全ての教会の教師が収入の1%を目標に献げていただく。1999年度以来の総会決議に基づく申し合わせを是非ともお覚えください。しかし何より、教会互助献金です。教師互助献金が60万円増えているのに、全体として40万円近く昨年同期より少ないということは、教会からの互助献金が100万円減少しているということになります。あと3ヶ月です。声を大にして呼びかけます。

教師も信徒も、信仰をもって、連帯の喜びをもって、互助献金を献げてまいりましょう。



2015年12月末現在

教会互助献金 **4,306,590円**
うち教師互助献金 **984,600円**

昨年同月

4,689,140円
388,700円

